

57 『外臺秘要方』の鍼灸

卷三十九「明堂」以外の掲載内容について

宮川 隆 弘

『外臺秘要方』は、唐代の医学書の中でも『千金要方』、『千金翼方』の後に成立した医学総書であり、唐代から現在までほぼまとまった形で伝わっている重要なものの一つである。本書において鍼灸の内容は随所にあり、卷三十九『明堂』以外にも多くみられる。こうした部分は隋唐代に存在した医学書の内容の一部分を示すものであり、また亡佚の鍼灸書の内容部分にも踏襲している部分が多く包括されていると考えられる。

卷三十九を抜く全四十巻の中で鍼灸に関連する掲載がある条文を列挙し、その条文数及び引用書名を検索した。

次に『外臺秘要方』において鍼灸の部分を引用した医学書の具体的な条文数から検討してみると、最も多く引用されたものは、「千金方」の157条で、他の医学書と比較

して遙かに多い。次いで、「集驗方」(48)、「肘後方」(27)、「千金翼方」(18)、「備急方」(17)、「崔氏方」(13)、「蘇恭」(10)、「范汪」(6)など一条のみ引用されたものも含めて28種の医学書が引用されていた。鍼灸書は、『黃帝鍼灸經』、『甲乙經』、『九卷』(各1)、『灸骨蒸法圖』(序文及び取穴法)が引用されていた。

『外臺秘要方』が引用した現存する医学書における鍼灸関連の掲載の中で「千金方」の引用が最も多く、引用した版本がどれであったのかは大きな問題である。宋版『孫真人千金方』及び宋版『備急千金要方』の両者と比較して、『外臺秘要方』における「千金方」の引用文の一部を対象に比較すると、用いた版本は前者の『孫真人千金方』が一致した。更に引用文の末尾に掲載された引用書の巻数も『孫真人千金方』が一致した。『外臺秘要方』所収の「千金方」から引用した鍼灸の内容は、『孫真人千金方』の重要な校勘資料及び欠落部分の確認もできる重要なものであると考えられる。

次に引用の多かった「千金翼方」の引用部分は、内容が元版『千金翼方』と一致するものの、各末尾の引用し

た巻数と元版『千金翼方』には、別の巻に掲載されていたり、追記されていたりしたものがみられた。これは、小曹戸氏、篠原氏が指摘しているように、現存する最古のテキストは、元版であり、林億らの校訂を受けているので、原型が更にかげ離れたものになっているという傍証の一つに挙げられるものであると考えられる。

『肘后方』は、『外臺秘要方』巻第六掲載の灸方のほとんどが引用されていた。この部分と明版『肘後備急方』巻二の掲載内容と比較すると『外臺秘要方』が引用した条文と順番の相違や未掲載のものがみられるが、ほぼ一致していた。この部分は古い版本の『肘后方』の一面を示すものかもしれない。

亡佚の医学書に関して、『集驗方』、『崔氏方』など比較的多く見られたが、多くは散在して掲載されている。ある程度一貫して掲載されたものは巻第十三「骨蒸傳屍鬼挂鬼魁」掲載の「灸骨蒸法圖四首」及び巻十九「脚氣論下」掲載の「脚氣灸穴」が該当する。

「骨蒸灸法圖」は、崔知悌序文がまず掲載され、次に四つの条文に分けて取穴法及び主治が掲載されている。第

二の条文までで、その末尾に「…出第七卷中」とあるが、第四、五の条文は、末尾に「…出第一卷中」とある。文脈から判断しても第四、五の条文は、崔知悌でなく別の人名が文頭にあることから、崔知悌とは関係のない医学書から引用したものであると考えられる。崔知悌序文及び第一、二条目の文章は、四花穴の最も古い伝承されたものであることは言うまでもない。

「脚氣灸穴」は、『医心方』巻八「脚氣」の部分とほぼ一致し、取穴法の末尾に「徐同。」「蘇同。」というように人名が見られる。これらについては、高文鑄氏の指摘のように、亡佚の『三家脚氣論』の内容ではないかと考えられる。

(岐阜県)